

# ケイク Another

フオーク篠崎  
ケーキ安西

一日目――

「すぐに帰宅してくれ」

仕事中に入った篠崎からの突然の連絡。質問を挟むより先に切れた通話に不安を覚えながらすぐさま早退した午後。

何があったのかと頭に浮かぶ嫌な想像を振り払いながらハンドルを握った。

安西は玄関ドアを開けてすぐ、目を見開いた。玄関まで出迎えてくれた篠崎にいきなり腕を掴まれ寝室に連れ込まれたのだ。

「篠崎?!」

篠崎の様子はおかしいが、ひとまず今すぐどうこうなる怪我や病気ではないらしい。それには安心したものの、力強い腕と突然の行動に混乱するままベッドに転がされてしまった。

「ちよっと、篠崎! どうしたんですか!」

声を上げるが篠崎は苦しい表情のままテキパキと拘束を進めてしまう。

普段プレイに使っている手枷と足枷。四本の鎖でそれぞれベッドの足に繋がれ大の字のまま身動きを取れなくされた。唯一動く首を上げ篠崎を見ると、その奥のクローゼットが開け放たれひどく荒らされているのが見えた。安西のそれよりも少し高いところにある篠崎の衣装ケースからはシャツが垂れ下がっている。

空き巣でも入ったのだろうか。まさか自分が篠崎の私物を家捜ししたとも思われているのか。それなら「すぐに帰宅しろ」と言われた理由に繋がる。すぐに誤解を解かなくては。

「篠崎何があったんですか、空き巣ですか」

「ああまじいな、理性がなくなりそうだ」

篠崎は安西と会話をしようとしめない。まるで安西の言葉が聞こえていないかのようだ。

まさか、耳が聞こえていない? だから電話でも質問をさせずに言うだけ言って切ったのか?

しかし拘束されている今、声を出す以外に意思疎通の方法はない。携帯はポケットにあるがそれを出すことすらできない。

「少しずつ慣らすか」

篠崎は舌打ちをすると寝室から出て行ってしまった。

「篠崎……?」

一体どうしたというのだろう。

確かに普段からプレイで拘束はされる。しかし今みたいに会話もせず強引になんてことは一度もなかった。

普段なら――安西の頬を撫でる手が頭の後ろに回り、優しく引き寄せられてキスをされる。キスが少しずつ深くなって、安西の気分がどんどんいやらしくなって、啗内を愛撫されながら乳首を揉まれて……あれよあれよと言う間に拘束されるのだ。

でもそのとき篠崎は必ず痛くないか確認してくれる。拘束がきつくはないか、体勢がきつくはないか。

そのとき安西が「今日は抱き合って優しいエッチがいい」と言えば篠崎はすぐに外してくれる。「すまない、怖かったな」怖くなんてないのにそう言って許しを乞うように頬を擦り寄せてくるのだ。時折それが欲しいが為にそう言うってしまい、その後で「二回目は動けないところを無理矢理してほしい」とおねだりするのだ。そのときの篠崎のふわりとした表情もとても好きだった。それなのに、今こうして安西の身を気にすることなく拘束し、出ていってしまうとはどういうことなのだろう。やはり家捜ししたと疑われてしまっているのだろうか。

「篠崎!!」

誤解を解くにはまずそばに来て話を聞いてもらわなければならない。しかしどれ程大声で呼んでも、篠崎は寝室に戻っては来なかった。

篠崎が寝室に来たのはそれから数時間が経ってからだった。

「!篠崎!」

何時間も寝返りひとつ打てずにいたせいで身体が痛い。けれどまずは誤解を解いて怒りを収めてもらわなくてはならない。

「篠崎、あの、僕、」

「フオークになった」

「え?」

紡がれた言葉に思わず聞き返す。

フオーク?何のことだろう。

「フオークになった。君はケーキだ」

「……え……?」

フオークとケーキ。まさか、そんな……。

篠崎はベッドから一番対局にある壁に寄り掛かりながら話した。ベッドまで数メートルはある。しかし安西は身動きすることができない。無防備な被食者である。

「君が出勤した後、味覚がおかしくなった。突然甘い香りがして行ってみると君の可愛がっているテディだったよ」

テディ。それは仕事で渡米することのある篠崎が、寂しくないようにと買ってくれた大きなクマのぬいぐるみだ。とても大きくてふわふわで、篠崎がいてもいなくても抱っこしたり抱き締めて過ごしたものだ。

「まさかと思った。それからベッドでは君が寝ている場所から甘い匂いがした」

安西は何も言えなかった。ケーキは自分ではそうと分からない。だが、篠崎の苦しそうな様子を見ると嘘ではないらしい。

「君がケーキでよかった」

篠崎が熱のこもった声で言う。

もしかして、今から食べられるのだろうか。怖い。けれど、篠崎がそれで喜ぶのなら――。だって篠崎は愛を知らない安西にたくさん愛をくれたから。幸せを教えてくれたから。

「篠崎、食べて」

「食べない」

即答だった。まるで言われることが分かっていたかのようだった。

「君のことは食べない。しかし監禁させてもらう」

篠崎は時折苦しげに眉根を寄せる。先ほどの理性がなくなりそうとはそう言うことだったのか。今も壁際に居るのは安西を食べてしまわないようにするためののだろうか。

さつき篠崎は「安西が出勤した後」と言った。しかし呼び戻されたのは午後になってからだ。その数時間、篠崎はどれ程悩み、一人で苦しんだのだろうか。

きつと荒れたクローゼットは家を出ようとした跡だ。安西を守るためにここから出ていこうとした。けれど、残ることを選択してくれた。安西を捨てないでくれた。それがフオークとしての本能だったとしても、理性を失わないようにと自ら部屋を出たりこうして遠くに立っているその愛が嬉しかった。

「君の体液は全てもらう。苦しいだろうが」

「いいですよ」

遮るように言う。今度は篠崎が瞠目した。

「いいです、僕の身体好きにしてください」

何をされるのかは分からない。けれど篠崎は元々とても優しい人だから、きつと今も理性と本能の狭間で苦しんでいる。篠崎だって好きでフオークになったわけではない。篠崎の苦悩を少しでも取り除きたかった。

「……いいのか」

「はい。逃げませんから、片手片足だけ外してもらえませんか」

ちよつと背中が痛くて、と言うと苦しいだろうに篠崎は走り寄ってきた。すまない、すまない、と繰り返しながら右手右足の枷が外される。コロリと横向きになり、身体を捻る。大分楽になった。

「ありがとうございます」

「なぜ礼を言う。俺が……」

篠崎は戻ることなく隣にいてくれた。

「篠崎が僕を拘束しなくても、僕はここから出ていきません」

「本当にいいのか」

「はい。職場には篠崎から連絡してくれますか」

外部に連絡を取れば、篠崎は不安になるだろう。幸いケーキとフォークは世間で知られているものだ。受理はされる。

「わかった」

職場の人間には迷惑をかけるが、緊急事態だ。それに篠崎の方が大事だった。

「僕にどうしてほしいですか」

「……待ってくれ、」

篠崎が顔を手で覆う。恐らく安西が認めるとは思っていなかったのだろう。普段から先を読む篠崎にしては珍しいことだ。いや、逃げようとすると読んでいたのかもしれない。それなら篠崎は安西の顔を見くびっている。安西の愛を。

「……唾液がほしい」

ようやく絞り出された声に首を傾げる。

「甘ければ、本当にフォークとケーキだ」

まるで死刑宣告のような声色だった。でもそれは一体どちらへの宣告なのか。

篠崎の指が安西の唇を撫でる。口を開くとそつと差し入れられた人差し指。舌を撫でる指腹は官能的だ。そんな時じゃないのに丁寧に開発された唾内は快感を拾う。

もつと、と自ら舌を絡める。まだ抜かないで、もつとほしい。指を吸い、奥まで誘い込む。目を閉じていやらしくねつとりと爪先を撫でると指が抜けた。

「あつ……」

「こんなときになのに君はいやらしいな」

「ごめんなさい」

確かに篠崎にとって人生を左右する一瞬だ。しかし篠崎には悪いが自分がケーキであるならば篠崎を手放す気はなかった。例え篠崎に食べられたとしても。

「……甘い匂いだ」

篠崎が唾液の絡む指を嗅ぐ。赤い舌先が覗き、唾液を舐めた。

「ああ……」

恍惚と絶望がない交ぜになった吐息。

「諒……俺のケーキ……」

「キスして」

唾液が美味しいのなら、とそう思ったけれどキスはもらえなかった。篠崎は徐々に慣らすから、と少し困ったような表情で言った。その顔はセックスの最中に安西が無理なお願いをしたときに見せるものだった。普段の篠崎。嬉しかった。きっと安西がフォークとしての篠崎を受け入れたことで精神的な負担が減ったのだろう。

フォークの気持ちは分からないが、衝動的に殺人まで起こすのだからかなり本能はきついはず

だ。なのに篠崎はそれに打ち勝とうとしている。もしかしたら今すぐ食べてしまうより——次いつ見付けられるか分からないフオークを探すことになるより、飼い殺しにした方が長く楽しめる考えたのかもしれない。

でも理由なんて何でもよかった。篠崎がフオークになってしまったことは悲しいけれど、自分がケーキで良かった。篠崎が他人の体液を求めなんて見たくない。耐えられないから。

それだけでなく、篠崎の苦痛を自分が少しでも減らすことができるのだ。もし自分がケーキでなかったら篠崎との食事を中心とする毎日が辛くなるだけだったかもしれない。

「篠崎、お水をください」

飲食が不快である篠崎に頼むのは忍びなかったが、拘束されている今それしか方法はない。篠崎は嫌な顔一つせずコップを持ってきてくれた。

そして左手首の拘束も外され、背中を支えるようにして起こされる。

「すまない」

「ありがとうございます」

にこりと笑って受け取って飲み込む。冷たい水が喉を通りすぎていく。

「……諒、本当に、」

「篠崎。僕は出ていきません。それとも僕が篠崎を拘束した方がいいですか」

数瞬の間があった。

「俺は君にひどいことをする」

追い詰められた表情。

「例えば？」

「外へは出さない。食事も排泄も管理する。造精剤を投与して、無理矢理射精させる」

「それから？」

「分からない。分からないが、きつともっと酷いことをする」

「……分かりました。じゃあ一つ約束してくれますか」

「何だ」

「僕を捨てないで。味に飽きたら、ちゃんと食べてください」

「諒、それは……できない」

「いやです。僕、捨てられるくらいなら篠崎に食べられたい。そしたら篠崎の身体の一部になれる……」

想像するだけでうっとりしてしまう。今までは篠崎の精液を飲み込む度に自分の身体に篠崎の遺伝子を取り入れられたと内心喜んでいたので。そしてその逆も。

「……わかった。だが君に飽きることはない」

「じゃあ死ぬまで一緒？」

「当たり前だ」

その口付は、おかえりのキスがなかったからか久しぶりのキスに感じた。さつきはダメと言われたのにしてしまっているのだろうか。それともこれは贖罪のキスなのか——。

それでも唾内に差し込まれた舌に唾液を吸われるといやらしい気分になっていく。もっと飲んで欲しくて、唾液の分泌が増えるよう舌を甘噛みする。咎めるように噛み返されて、身体が跳ねる。だって噛まれるのはとても気持ちがいいのだ。

「はあ……しのぎき、もっと……」

「だめだ、すまない、理性が保てそうにない。少しずつ味と匂いに身体を慣らしたい」

「……わかりました」

「すまない」

「やだ、謝らないでください。僕は僕の意味でここにいますから」

それから篠崎は少し離れたところに座った。まずは同じ空間で身体を匂いに慣らしているのだろ。

結局足枷だけを嵌められたまま、静かに同じ時間を過ごした。

篠崎の理性の強さには驚かされた。夜にはもう今までと変わらない態度になったのだ。フォークであるという絶望にしても、安西の匂いにしても、どちらも心身が受け入れたのだ。

「諒、すまない」

「いえ、どうしたらいいですか」

「まずは食事を」

篠崎はデリバリーサービスに連絡をして二人分の弁当を注文した。

「腹が減っただろう。気付かなくてすまなかった」

「謝ってばかりですね。お昼ご飯食べ終えてからだったので大丈夫ですよ」

普段の食事は圧倒的に篠崎の方が多い。安西の二倍は食べる。その食事を考えるとこれくらいは食べられるのかと少しだけ不安になるが、ある意味遠慮なく身体を求められるということなので楽しみでもあった。

「すまない、ベッドの上でいいか」

「ええ。大丈夫です」

渡された弁当はまだ温かい。蓋を開けるとほわ、と蒸気が顔に掛かった。

「篠崎は食べないんですか」

「……いや、食べるよ」

きつと、怖いのだろう。味覚を失ったという現実を食事の度に突きつけられることになるのだ。でも食べなければ身体は弱ってしまう。どうにかして食べてほしかった。

「味、感じないですか？どうしたら食べられますか」

「唾液が欲しい。精液でもいい」

「じゃあ、口移しで食べさせましょうか」

普段、もう指一本動かせないというほど食われ、セックスの後に飲ませてもらう口移しの水。されるばかりでしたことは一度もない。篠崎の世話をできるなんて、少し嬉しくなった。

「いいのか」

「こっちへ来てください」

篠崎がベッドに座る。ベッドが沈み、そちら側へ身体が傾いた。

「どれ食べても味がしないんですか」

「ああ」

「じゃあ、食べやすそうなのから」

ベッドの上なので失敗はしたくない。煮物の人参を口に含み、篠崎に口を寄せる。

「んっ……」

お腹が空いていたのだろうか、奪い取るように人参を取られた。これでは口移しというよりただの口の器だ。

「美味しい……」

「いつ振りの食事ですか」

「今朝、君が作ったものが最後だ。食後のコーヒーの味がなくなった。それからいくつか試したがどれも吐き出した」

「お腹空いたでしょう……沢山食べましょうね」

次々口に入れ、食べられていく。施しを与える、みたいなのを想像していたのに全然違った。でもその強引な様子にまた惹かれていく。

篠崎の弁当はすぐに空になった。それでも満たされていないようだったので、安西の分を食べさせていく。

「諒、美味しい、諒……すまない」

篠崎は飲み込むことに謝った。でも謝罪の言葉を聞きたくなくて、すぐに口を塞ぐ。

「僕、美味しいですか」

「ああ。すごいよ。すごく美味しい」

「嬉しい……沢山食べて……」

女の人がセックスで「私を食べて」と言う気持ちがあった。いや、**△**だけなのかもしれないけれど、捕食されたいと思ったのだ。骨の髄まで吸い尽くされたい。

「だが諒、君の分が」

「いいです。キッチンに何かしらありますし。まずは篠崎がちゃんと食べてください」

篠崎はありがとうと言ってまた安西の口を塞いだ。

「あの、ごめんなさい、トイレに行きたいんですけど」

弁当のゴミを捨てて戻ってきた篠崎に言う。足枷は繋がれたままなので——手が自由なので自分で外せないわけではないのだが——自由に動くことができない。

「おしっこか」

「はい……」

さらりと言われ、恥ずかしくなる。

「飲ませてくれ」

「え？」

篠崎は大腿で近付くと安西のズボンを下着ごと下ろした。鎖にズボンが絡まる。

「や、篠崎っ」

「いい匂いだ。きっと諒はおしっこも甘いんだろうな」

「や、うそ、ねえ」

ケーキは体液が美味しいと聞いているけれど、尿も体液に含まれるのだろうか。ああでも血液や肉も美味しいから、そうなのかもしれない。

「篠崎、本気ですか」

「喉が渴いたんだ。何を飲んでも味がしない」

「……分かりました」

確かに食事中、何も飲み物を飲まなかった。味噌汁もなかったから喉は乾いているだろう。

味がしない、それなのに空腹は感じるなんてとても辛いだろう。

「あの、どうしたら……」

「啜えるからそのまま口に出してくれ」

「……あの」

「ん？」

篠崎はすでにペニスの先端を啜えている。

「……勃起、しちやいそうです……」

恥ずかしい。なんでこんな、篠崎が辛いときに勃起なんてしてしまうのだろう。けれどさっきの食事だって、濃厚なキスのようで性感を拾っていたのだ。その後には啜えられればそうやってしまったって仕方がない。

「構わない。先に射精するか？飲みたい」

「おちんちん、射精させてください」

射精のおねだりはセックス中に教え込まれた挨拶の一つだ。ご主人様であり、飼い主であり、恋人であり、父親のような篠崎に対する礼儀の挨拶。

「うん、どうやって射精したい？」

篠崎の返答も今までと変わらない。

「勃起……させて……たまたま潰して」

「痛いのがいいかな」

「はい、痛くしてください」

普通に扱われるだけではなかなか射精に至れなくなったのはいつの頃だったか。もう篠崎の助けがないとオナニーすらできない。手を借りてる時点でオナニーとは言えないのだろうかけれど。

「噛んでしまうかもしれない」

「はい」



「いいのか」

「はい。噛んで……」

篠崎が口を開けた。見せつけるような白い歯。亀頭に前歯が当たる。まだ当てているだけだ。ああ、今からこれがひどい痛みをもたらす。期待でおちんちんが硬くなっていく。硬くなればなるほど痛みが増しそうなのに、どんどん充血してしまう。

篠崎がちらりと安西を見た。ああ、噛まれる——噛まれ——

——ガリッ

「くっくっ!!!」

声も出ない程の痛みだった。当てられていた前歯が亀頭に食い込む。裏スジに下の歯が食い込む。痛い。痛い。しかし噛む力は強いままだ。背を丸め、歯を食いしばる。痛みに耐えかねて篠崎の頭を引き離せば食いちぎられる。篠崎が満足するまで痛みに耐えなければ——

「ああああ!!!」

亀頭に集中している間に今度はタマを握られた。グツと強い痛みが陰囊を襲い、ツキーンと下腹部が痛くなる。痛い。痛い。おちんちんもタマも下腹部も、痛い。痛い痛い痛い。

「ああああ!!! いたいいたい!!!」

耐えられない、もうだめだった。篠崎の頭に手を添える。離して、もうやめて。

「あがあががああ!!!」

頭を押してもやはり篠崎は力を緩めなかった。むしろ放すものかと力が強くなる。

「あ……アアア……」

痛みが徐々に弱くなっていく。顎が離れた？それとも力を弱められた？

下を見る。篠崎の口はまだ痛々しいおちんちんを啞えたままだ。唇のところに赤いものが見える。血だ。噛まれて血が滲んでいる。

血が出ていると思えば痛みが強くなりそうなものなのに、やはり痛みが弱くなっていく。まさか神経が切れたわけではないだろう。恐らく脳内麻薬だ。頭がぼーっとしていく。身体の力が抜けていく。

「……は……」

しよろ……しよろしよろ……

「ああああああああああ!!!」

力の抜けたおちんちんからおしっこが漏れた。それが傷に滲みる。痛みが脳が覚醒した。でも尿は止まらない。それどころか、篠崎が美味しそうに啜っている。

「いたいいたい!!! いたい!!! はなしてええええ!!!」

頭を押しても離れてくれない。吸う力が強まっていく。痛い。痛い。

「いたい……いたい……おちんちん痛い……」

涙が止まらず溢れる。水っぽい鼻水が唇まで垂れてくる。不快なのに拭う気にすらなれない。

「いたいよおお……」

「……諒」

「いたい……」

「諒」

「痛い……痛い……おちんちん……タマタマ……」

「諒、終わったよ」

目の前に篠崎が映る。篠崎の奥には天井が見える。いつの間には自分はベッドに寝転んでいたのだらう。

「諒、ありがとう。頑張ったな」

「しのぎ……ぼく、ぼく……」

「うん、痛かったな。耐えてくれてありがとう」

「ううー……」

涙の量が増えた。もうぐしゃぐしゃだ。

「……諒、可愛い……」

篠崎に涙を舐められた。左右、交互に流れ落ちるのをその都度。

「しのぎ……」

「うん、うん……」

それから篠崎は涙が止まるまでそうしてくれて、汚いから嫌だったのに鼻水まで吸ってくれた。

「やだぁ……」

「うん、すまない……」

そう言つて、切なそうな顔で赤ん坊にするみたいに鼻水を吸った。

涙も鼻水も落ち着くと、篠崎は温かいタオルを持ってきてくれた。篠崎の唾液でかびかびの顔を拭いてもらい、真っ赤な鼻が可愛いと鼻へのキスを受けた。

「おちんちんを見せて」

「あ……」

怖い、と思ったのは一瞬だった。でもすぐに違うと思ひ直す。この身体は篠崎に捧げた身体なのだ。食べてもいい、と一度は口にしたものなのだ。

「お願いします」

篠崎に向かって大きく足を開く。くたりとしたおちんちんの先っぽには血の塊があった。

「痛かったな」

「……痛かったです」

「うん、すまない……」

篠崎は決して言い訳をしない。そして安西の怯えも全て受け止める。

「……僕の血は美味しかったですか」

「……ああ」

「涙も、鼻水も？」

「ああ。とても甘い」

「じゃあ、これも食べてください」

安西は亀頭にあった五ミリ程の血の塊を無理矢理剥がした。剥がしたそこからはまた新たな血が滲む。

「口開けて」

薄く開けられたそこに血の塊を押し入れる。

「舐みたい？」

「うん、美味しい……」

篠崎は泣きそうな顔で笑った。

~~~~~

せめてお尻の中を洗ってからにしてほしい、そう言ったけれど聞き入れられることはなかった。指サックを付けて解してくれたのはせめてもの優しさなのだろうけれど、指サックに汚れがついてしまっていると思うと恥ずかしくて隠れてしまいたかった。それなのに、正座をするように座る篠崎の太ももの上に足を開くようにして尻を乗せられてしまえば逃げることも隠れることもできなくて、しかも正面から篠崎と顔を合わせなくてはならなくて、久しぶりにきつい躰だった。痛みや強すぎる快感の方が何倍もマシだった。

「今日うんちはしたかな」

「やっ……」

「赤ん坊の健康管理はパパの仕事だろう」

さっきパパと言ったのを根に持っているのだろうか。

「ああ、赤ん坊だからうんちをしたかどうかも分かっていないのかな。大丈夫、今から中を調べてあげよう」

「やだっ、やめっ……あっ……」

指が中を抉る。何か、指じゃないものが中で動いている気がする。

「ああ、うんちがあったよ。今日はうんち出てないのかな」

「や、ごめ……ごめんなさい……やめて……」

「大丈夫、パパに任せなさい」

「……パパ……」

ああ、きつとパパと赤ちゃんのセックスなのだ。これはプレイなのだ。それならパパに身を任せてしまえばいい。

「ほら、力を抜いて。それともこのままうんちしてみようか」

「やっ……」

「うんち出ない？」

「出ない……」

本当は肛門を刺激されて排泄欲求を自覚し始めていた。けれど篠崎の目の前ですんなり排泄な

んてできない。

「じゃあこのままローターをここに入れるよ。ローターにうんちを解してもらおうか」

「やっ!」

「さっきから『いや』ばかりだな。反省していないのかな」

「……パパごめんなさい。うんちさせて……」

うんちがそこにあるのにローターなんて入れられたら、抜かれたローターには目も当てられない。

「いいこだ。じゃあんーってしてごらん」

「んーっ……」

一応力を入れてみたが、仰向けで腰が頭より高いなんて状態で排泄ができるわけがなかった。「もう一度」

それでも篠崎は排泄させたいようだった。今このスタイルで排泄なんてしたら、篠崎の太ももに排泄をしてしまうのに。

「んーっ……あっ!」

いきんだせいで、想定外におしっこが出てしまった。止めなきゃ篠崎を汚してしまう、と思ったのに、篠崎は即座に安西を下ろし、ぱくりと啜えてしまった。

「あっ……出てるっ……」

排泄より、篠崎のバキュームの方が強い。もっと出せ、もっと出せと催促されているような気になってくる。噛まれた傷に滲みる。痛い。なのに気持ちいい。

「あっ……」

先ほど出したばかりだったので量はそれほど多くなかった。すぐに止まってしまう。けれど篠崎は物足りないのか尿道口を舌でつつんと突き、続きを促した。

「もう出ない……」

しばらく残滓を吸い取る動きをされていたけれど、それも終わって解放された。

「ごめんなさい」

「赤ん坊はおしっこもうんちも自在にはできないから気にすることじゃない。美味しかったよ」  
「……僕のお漏らし、飲んでくれてありがとうございます」

ケーキの篠崎にとっておしっこが美味しいものであることは分かっていたけれど、篠崎は食欲には満足していたし、今のはきつとベッドを汚してしまわないためだろうと思う。そして篠崎が飲みたかっただけだから気にするなど、そういうことにおいておいてくれている。

「もう一度んーってできるかな」

「……はい、頑張るからパパ僕のお尻見て……」

もう一度先ほどと同じように篠崎の膝の上に尻を乗せて足を開く。

「んーっ……」

「うん、もう少し。お尻の穴が膨らんでるよ」

「んっ……んんっ……」

ミチ、と音がした。出てしまう。篠崎の足の上にもうんちを出してしまう。全てを見られてしまう。

「頑張っている顔、可愛い」

「あっ……」

恥ずかしさに力が抜け、アナルを締め付けてしまった。途端、途中まで出ていたうんちが途切れた。

「少しだけ出せたな。全部出そうな」

篠崎が下を見ながら言った。きつと安西のうんちを見ながら言っているのだろう。そう思うと消えてしまいたいほど恥ずかしかった。

「ほら、諒」

「……んっ」

再度腹に力を入れる。篠崎はうんちをしても引いたりしない。むしろ篠崎にうんちをするように言われているのだから、上手に出せたら褒めてもらえるかもしれない。

「あっ……でちゃ……」

「うん、出てきた」

少し柔らかかったのか、こんな不自由な体勢でもうんちはゆっくりと体外に押し出されていく。

「上手……ちゃんと出せて偉いな」

ゆっくりとうんちが肛門を抜けていく。長い。早く終わればいい。そう思うのに、時が止まればいいとも思った。このままずっと、はしたない排泄を見ていて欲しい。そして沢山褒めてほしい。

「いいこだ……ちゃんと一人でうんちが出せたな」

むわりと嫌な臭いが部屋に充満する。篠崎はどうするつもりなのだろう。

「お尻が気持ち悪いだろう。拭くものを持ってくるから少し待っていなさい」

そう言うとき安西の腰を下ろした。うんちをどうするか気になり、動きを目で追う。

「……」

篠崎は安西の排泄物をまるで汚いものと思っていない様子で手に取った。

「や、篠崎、」

「大丈夫、食べたりしないよ」

「なっ……」

そんなこと、想像すらしていなかった。単純に素手で持っていることをやめてほしかっただけなのに。

「トイレに流してくる」

篠崎はそう言うとき部屋を出て行った。耳を澄ませていると確かにトイレの水音が聞こえたり、篠崎はパンツ一枚の姿ですぐに戻ってきた。食べない、はさすがに本当だったようで安堵の息を吐いた。服を脱いだのは排泄物で汚れてしまったからだろう。

「お尻が気持ち悪いな。腸内洗浄機が届けばこんな気持ち悪い思いはしなくて済むから」

「ん……」

最初はウェットティッシュで、それから濡れタオルでお尻を拭いてもらう。気持ちがいい。甘やかされている。

「とろんとしてるな。うんちが気持ち良かったか」

「うん……うんちのお世話気持ちいい……」

でも篠崎は引いてしまったのだろうか。

「可愛い……本当に赤ん坊みたいだ」

「篠崎は赤ちゃんが好きなんですか」

意識はしていないのに甘えたような、拗ねたような声になる。

「違うよ。大人の諒くんが赤ん坊みたいだから可愛いんだ」

ほら、と言われて押し付けられた尻に当たる硬いもの。

「おちんちん勃起してる……」

「うん、とても可愛くて。腸内洗浄機は使わずこれからも自分でうんちしようか」

「あの、それって……」

腸内洗浄機、という名前からなんとなく分かるけれど、実際にはどういうものなのだろうか。シリンジのようなものなのだろうか。

篠崎はうんちの処理を終えてベッドに寝転がると抱きしめながら説明をしてくれた。

「腸内洗浄機はお尻にプラグを入れて、そこにチューブを挿すんだよ。あとはスイッチを入れるだけでチューブを通してお湯が中に入って、一定量注入が終わると少し時間を置いてからバキューム機能に切り替わる。だから諒はもういきむ必要もないし、便秘の心配もない」

「……うんち、篠崎が処理してくれるんですか」

なんだろう。本当だったらそんなことをされたら嫌悪感でいっぱいになるはずなのに、とても魅力的に思えた。されたい。うんちを全て管理してほしい。でもさつきみたいに自分でん……と頑張るところも見てほしい。どちらがいいかなんて選べそうになかった。

「さつきも言っただろう。赤ん坊の諒くんのこととは全て俺が世話をするよ」

「赤ん坊じゃない、えっちな僕のこととは？」

「もちろん恋人としてお世話をするよ」

「射精のお世話？」

「そう」

ドキドキした。パパとして排泄を管理され、恋人として射精を管理されるなんて。

~~~~~

篠崎がドアを開けた。カーテンがつけられただけで荷物一つ置かれていなかったはずの部屋は様変わりしていた。

まず目を引いたのは柔らかそうなベッド。そのすぐ近くには小さな冷蔵庫。それから点滴スタンド。病院にあるものと遜色ないそれはキャスターも付いていて移動もできるようだ。

それから何やら大きな機械。五十センチ四方の箱の上にウォーターサーバーのボトルのようなものが付いている。側面から電源コンセントが繋がれ、表からは太さ三センチほどの透明なチューブが伸びている。恐らくこれが腸内洗浄機だろう。

あとは箱が開けられただけの段ボールがいくつか。きっとこれらは今すぐ出す必要のないもので、中身だけ確認したのだろう。

「入って」

背中を押され、足を踏み入れる。篠崎が寝ている間、自分が一人で過ごす部屋。

「この点滴は、水分と媚薬と造精剤用だ」

「え……」

水分補給なら自分でできるのに。それに媚薬はまだしも造精剤も点滴投与されるのか。つまり長時間投与され続けるということだ。

「気付いているだろうが、これが腸内洗浄機。俺が寝ている間はこれで洗浄される。起きている間はまた可愛い排泄を見せてくれ」

頬を撫でられて、全身が熱くなる。可愛い排泄、だなんて。

「段ボールの中にはいろいろ細かいものが入っている。見られて困る物はないが、注射器のように危ないものがあるから触れない方がいい」

注射器なんて一体何に使うのだろう。しかしその疑問が言葉になる前に篠崎が言った。

「ああ、それからあそこにあるのは自動搾精機だ。俺が寝ている間に沢山吐き出しておいでくれ」

「……篠崎が寝ている間に……」

「そうしたら諒が寝ている間に俺も食事が取れる。そうすれば食欲が落ち着いた状態で一緒に過ごせるだろう」

「……はい」

恥ずかしい。一人で機械に精を絞られるのだ。それを後で篠崎が飲む……。

「今から俺は少し寝るから、セッティングしよう」

全裸で横になるように言われ、ベッドに寝転がる。かなり寝心地がいい。下手したら眠ってしまいそうだ。

それから足の鎖がベッドの脚に繋がれる。ドキドキする。篠崎が起きて部屋に来てくれるまで、もうこの部屋から出ることはできない。

「冷蔵庫の中には飲み物と簡易食が入ってる。そこからドアは開けられるか」

試しに手を伸ばしてみる。ドアも開けられるし、一番奥まで手も届いた。

それを確認すると今度は搾精機のチューブを手を取った。

「これが、おちんちんから精液を搾るよ」

見せられたのは小さな薄いピンク色のオナホールだった。それが本体から伸びるチューブに取り付けられる。

「形状に飽きたら他のオナホールに交換できる」

そう言って機械のスイッチを入れた。すぐに動き出す機械。

「見えるか」

オナホールの穴の中が見えるよう、目の前に掲げられた。

閉まった穴を指でそっと開いてみる。細かい襞がうねうねと動いていた。どうやら普通のオナホールではないらしい。当たり前か。

いやらしく動く襞に合わせて、少しずつ内部が濡れていくのがわかった。きつと乾燥しないようにローションが随時追加されていくのだろう。ということは機械を止めない限り本当に終わりにくく搾られ続けるということだ。

「それから射精した精液はチューブを通じてタンクに溜まる」

その後も篠崎の説明は続いた。精液は量が少ないのでチューブの途中で止まらないように常に吸引がされていること。つまりバキュームフェラが続くようなものだ。

それから機械を止めるには本体裏のスイッチを切る必要があるが、それは安西からは届かないこと。精液が出なくなつたからといって自動では止まらないこと。摩擦で痛くなりにくいようになり柔らかい素材のオナホールであるということ。部屋は防音なのでいくらでも泣き叫んで構わないこと。そして、どうにも耐えられないときは携帯で篠崎を起すこと。

「大丈夫か」

「……はい……」

篠崎が止めてくれるまで搾られるなんて、はつきり言つて恐怖しかない。普通にセックスしていたつて多くて四回も吐き出せばもう何も出なくなつてしまうのだ。でも、篠崎にとつて安西の体液はほとんど唯一の味覚なのだ。肉体は食べない。それなら精液やおしっこ、それから汗や涙しかない。汗なんて舐める程度しかかけないし、涙だつて故意に出せるものではない。それならやはり精液とおしっこがメインになつていくのだろう。

「嵌めるよ」

篠崎がスイッチを切つたオナホールをペニスに入れた。まだくたりと柔らかいそれでもホールは簡単に飲み込んでいく。

「あっ……」

動いていないのに、十分に気持ちがいい。柔らかくて、少し温まっている。

「このローションには少しだが媚薬が入っている。だからきつと気持ち良くなれるよ」

「はい……」

性に従順なおちんちんはすでに硬くなり始めている。無機質なその与える快感に期待している。

そして、スイッチが入れられた。

「あっ、アツッ！アツ、アツ！」

それは想像以上の気持ち良さだった。本物の膣の感触は知らないが、恐らく比較にならない気持ち良さだろう。男の性感を高め、射精させる為だけに作られた機械なのだから。



「あつ、だめっ、もおっ、」

「もうイクのか？」

初めての稼働だからか、篠崎は横で見守っていてくれた。

「イツ、イツ……ああああ……！」

びゅ、びゅつと精液が吐き出される。いつもなら尿道や尿道口に溜まる精液の不快感があるのにバキュームによって吸い出されるせいでそれすら感じない。そしてイツたばかりのおちんちんに変わらず続けられる刺激。それも先ほどのようなピストンとは動きが違うのだ。先端、亀頭が触れている部分が高速回転を始めたのだ。

「ああああ……！やめてええ……！まって、まってええ……！」

「すごいな……そんなに乱れるのか」

勃起が萎えることすら許してもらえない。射精直後の執拗な責め。くすぐったい感覚のあとに訪れる不安感。漏れてしまう、何かが上がってきてしまう、漠然とした快感。

「あああつ……！だめっ、まつ、まって、だめっ」

来る、何かが来てしまう。

「ああああ……！」

「潮か」

「あああ……！」

おちんちんから噴水のように発射されている感触はある。しかしそれらも全て吸引され、タンクに吸い取られていく。

隣でペラペラと紙を捲る音がした。

「諒、すごいな。これは粘度に反応して精液と潮を分けて溜め込むらしい。おしっこは潮に分類されるらしいが、きちんと吸引されるから失禁しても大丈夫だよ」

「あああ……ああああ……！」

篠崎が何かを言っているのは分かるが到底頭に入っていない。もう無理と思うのに、潮の噴出が終わるとホルルの動きがまたピストンに戻ったのだ。射精と潮の終わりを感知しているとしか思えない動きの変化だった。

「ああああ……！いやああ……！やめてえええ……！出ない……！もう出ないからあああ……！」

「まだ出るよ。大丈夫」

篠崎に頭を撫でられ、缙るように手を伸ばす。篠崎は優しく抱きしめてくれた。

「苦しいのに、俺のためにありがとう」

「あ……」

そんなことを言われたら、耐えてしまう。なんとしてでも耐えようとしてしまう。

「あつ、出るっ……！でるうっ……！またでちゃっ……！」

篠崎に触れられ、人では再現できない動きを繰り返され、もうイケないと思っていたはずのおちんちんが絶頂を迎えた。そして精液の吸引が終わってすぐに回り出す先端。擦られる亀頭。吹き出す潮。

「あああああああ!!!」

篠崎の手淫ですら強引な快感だと思っっているのに、それを何倍も上回る無理矢理な快感。止まることのない動き。

「あああああ!!!いやあああ!!!」

「おちんちん辛い?」

「つらいっ!!おちんちんもう出ないッ!!」

この数分で二回も射精した。人間の手では決してありえないペースだ。それでもまだ機械は精液を搾り取るうと動きを続けている。

「ああああ!!!ぎもぢいい!!!ぎもぢいいよおお!いぎだいい!!!」

イきたい。射精したい。なのに、出ない。出せない。あと一歩が進めない

「う……ああああ……壊れる……ごわれるうっ!!!出したい!!!」

苦しくて涙が落ちる。その涙も篠崎の身体の一部となっていく。

「あ……あああっ」

オナホールはピストンをやめない。もうやめてほしい。だって出したいのに、出すものがない。けれど、やめないでほしい。篠崎のご飯をしっかり搾ってほしい。

「諒、愛してる……」

「しのっ、……あっ、アッ、出したいっ、出したいいいいっ」

「出ないのにごしごしされるのは辛い?」

「づらいいい!!」

「じゃあ精液が出るようにしようか」

なんて優しいのだろう。篠崎はいつもこうして助けてくれる。必死にコクコクと首を振る。

「出したいっ、精液出したいよおっ」

「うん、いいこ……じゃあ精液出るようにしような」

篠崎は身体を離すと段ボールをごそごそと漁りだした。その間にもオナホールはピストンを続けている。柔らかいそれに取り込まれて、溶けてなくなってしまうんじゃないかと思うほどの快感。しかし昨夜も今もしっかりと射精した身体はもうどんなに感じようと出すべき精液を残していない。

「たまたま痛いけど、頑張れるか」

「頑張るっ!」

構わなかった。この終わりのない責めが楽になるのなら。射精ができるのなら。痛みで済むのなら。

救世主のような篠崎を見る。段ボールから取り出したらしい手枷が嵌められる。

「え?」

さらには点滴パックも手にしていた。

「え……?」

一瞬おちんちんへの刺激を忘れた。

「造精剤をたまたまに点滴するよ」

篠崎の口調は変わらず優しい。なのに、しようとしていることは決して優しくない。いや、望んだのは、射精をしたいと言ったのは安西で、けれど――

「激痛だ。危ないから嘔んでいなさい」

くくく

『諒』

篠崎の声だけが聞こえる。安西がカメラの方を見る。カメラ側に篠崎がいるのだろう。瞬時に安西の表情が恐怖に固まった。

『これでおちんちんを痛めつけなさい』

『や、それは……』

映ってはいないが、安西はもちろん知っている。篠崎が持ってきたのはネズミ捕りだ。

『マウストラップだよ。知っているだろう』

『や、しのざき……』

『貞操帯が嫌だと我儘を言ったのは諒だろう。『いや』と言った四回、自分でおちんちんにお仕置きしなさい』

「あああつー!!」

ネズミ捕りのお仕置きを思い出し、安西は射精した。即座に吸引され、亀頭が擦られる。気持ちいい。けれど、スクリーンの安西は泣いていた。

『ごめんなさい、ごめんなさい……』

『諒』

篠崎が映る。ベッドの上にネズミ捕りを置いた。きっと撮影しているのを意識してしっかりとカメラに映るようになっているのだろう。

『早くしなさい。使い方は分かるか』

『わかりません……』

篠崎がスクリーンから消える。そしてすぐ、安西をお仕置きするとき用のデイルドを片手に戻ってきた。

『ネズミ捕りのこの部分にこうしておちんちんを置くんだ』

言ったようにした途端、バチン！！と酷い音を立ててデイルドが挟まれた。篠崎がトラップ部分を持ち上げて仕掛けを戻す。取り出されたデイルドは一瞬のことだったのにくっきりとトラップの痕を残していた。

『使い方は分かったな。四回だ。自分で声を出して数えながらやりなさい』

『しのざき……』

『早くしなさい』

『無理です……ごめんなさい……』

先ほどはちよつと触っただけで射精してしまいそうな程に勃起していたのに、安西のペニスはくたりと力を失っている。

『篠崎がしてください……僕のおちんちんをお仕置きしてください』

『自分でずると言っただけだ』

そうだ。確かに自分ですると安西は言った。それにこれはお仕置きなのだから、甘えは許されない。

安西は涙を溢しながらおちんちんを扱いた。柔らかい状態よりは勃起している方がいいと思っただのだ。小さいおちんちんは柔らかいままだと本当に潰れてしまう。

『勃起しないな』

『ごめんなさい、ちゃんと勃起させておちんちん挟みますから、待ってください』

安西はごしごしと必死に扱っている。

「ああああっ!!」

その時の必死さと、その後の痛みを思い出して安西はまた射精した。

『勃起できました……』

報告をしても篠崎は何も言わない。当然だ。勃起させることがお仕置きではないのだから。

『い、一回……』

辛うじて硬さを維持したおちんちんを掴み、ネズミ捕りに近づける。

『こ、怖いいい……』

ぐす、ずずつと鼻水の音が聞こえる。

『諒』

『はいっ……』

バチイイン!!!!!!

『あああああ!!!!!!』

先ほどのデイルドよりも激しい音が響いた。

約八万三千文字あります。

宜しくお願い致します！